

第98回 キャロル・キングとケメ子の コミカルなアンサーソング

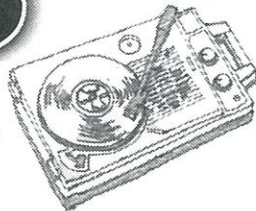
日劇ウエスタンカーニバルが開催された昭和33年はポール・アンカの『君は我が運命』などが平尾昌章ら多くのロカビリー歌手によってカバーされました。ロカビリーブームが一段落した昭和35年、今度はニール・セダカに人氣が集中、この二人の若手シンガーソングライターがその後の歌謡界と若者に与えた影響は計り知れません。

昭和34年に始まったレコード大賞の第1回受賞曲『黒い花びら』は『君は我が運命』に触発されたメロディーが若者の心をつかみ、ニール・セダカの『恋の片道切符』はGSへとつながる哀愁ポップスへの道を開きました（ほとんどのヒット曲が自作曲作品であるニールにとって、この曲だけは提供曲でした）。

アメリカ本国では、『恋の片道切符』は大ヒットを記録した『オー・キャロル』のB面扱いでしたが、日本ではA面にさしかえて大成功、原曲で歌われている「ハートブレイク・ホテル」や「バイ・バイ・ラヴ」

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎
絵 松本 浦

まやつヒロシらもカバー、日本におけるニールの人気を確固たるものとなりました。

日本語盤ではB面扱いだった『オー・キャロル』ですが、実はニールのガールフレンドだったキャロル・キングのことを歌ったもので（スペルは彼女の本名のほうを使用）、この曲には、キャロル自身の歌唱によるアンサーソング『オー・ニール』が存在しています。

彼女がアルバム『つづれおり』でブレイクする10年以上前、まだ売れない歌手として活動していた当時の第4弾シングルとして発売された『オー・ニール』ですが、旋律は同じながらその歌詞たるや、「私のおじいちゃんはあるあなたの歌が大嫌い。私がレコードをかけると銃殺されちゃう」といったコミカルかつブラッきな内容でした。

前回とりあげた昭和43年のヒット曲『ケメ子の唄（歌）』にも、アンサーソングがいくつか誕生しました。決定版は、松平ケメ子が歌った



『私がケメ子よ』で、『スーダラ節』『エイトマン』などの萩原哲晶が作編曲を担当、クレージーのコミックソング+女性一人GSソング風に仕上げられています。ケメ子の名前を世に周知させた柳家小せんが共作詞者に名を連ねていますが、「愛するアニータ」「乙女の祈り」など、当時のGS関連ヒット曲を歌詞に挿入しているところは『恋の片道切符』を彷彿させます。

『私がケメ子よ』のB面では本家の『ケメ子の唄』をとりあげていますが、歌詞を大幅に改編し、リズムを早めビートを利かせたアレンジが松平のハスキーな声質とマッチして、なかなかの和風ロックンロールになっていると私は評価しているのですが、柳の下の三匹目ヒットとはなりません。

翌昭和44年、松平ケメ子は『別れても好きな人』をリリースしますが、ヒットには至らずケメ子の夢は砕けます。その10年後、同曲はロス・インディオス&シルヴィアがリメイクして大ヒットすることになりました。